永久保存版

Mild Vind

ミルヴィン

2024.11

Nr.2

やさしい風を届ける　ＴＥＮＡニュースレター

TENA

明日につながるやさしさ

TENAを導入いただいている施設様 ……→ vol.3

社会福祉法人 立命会　特別養護老人ホーム
しらゆりの園様

ご利用者の笑顔のために コンチネンスケアを基にした自立支援

DATA
住所：沖縄県南城市知念字久手堅275－1
URL：http://sirayuri.or.jp/
定員数：70床（ショートステイ10床）

自立支援型介護を目指し、日中はトイレで用を足して、寝る時だけおむつを活用する「日中おむつゼロ」を実現されているしらゆりの園様。TENAの日本上陸当初からご利用いただき、今年で36年。あきらめない、あせらない姿勢で、全国でも注目されるコンチネンスケアを実現された同施設の取り組みを紹介します。

布おむつという常識を覆し「おむつを外す」に挑戦

自立支援はコンチネンスケアから

しらゆりの園様は「おむつ交換型介護から自立支援型介護の確立へ」という理念と共に歩み続けてきました。1988年の設立以来、36年にわたる歴史の中で、設立当初からコンチネンスケアに力を入れて取り組んだ理由は、友名孝子理事長の布おむつでの介護の経験からでした。

「サラシの布おむつを巻き付けられたお年寄りは、おむつがかさばり身動きが取りにくくなります。そして活動が少なくなって、トイレにも行きたがらなくなる。当時の介護施設には、自分でトイレに行けるようにするためのケアという意識はありませんでしたから、ずっとおむつをつけたまま。どんどん活動量が減って寝たきりになり、おむつの重ねが厚くなるという悪循環でした」（理事長／友名さん）

おむつを外すためのTENA

介護の環境を改善したいとの思いを抱えている中で出会われたのが、TENAだったそうです。テストとして使用するうちに、活動しにくい布おむつから脱却するためのアイテムとして、尊厳を守る個別ケアというTENAの理念に共感いただき、「お年寄りを元気にしたい」という目標が見え始めたと言います。

「尿吸収がよく、べたつかないから不快感が少ない。夜のおむつ交換を減らすことができればご利用者もぐっすり眠れて、昼間は元気に過ごせるようになる。ひょうたん型のパッド、人間工学に基づいて設計されたデザインなど使う人のことを第一に考えられている点も、信頼できました。1枚あたりの価格は高価でしたが、ご利用者のため、スタッフのため、良質なケアを提供するためにはTENAが不可欠だと思いました」（友名さん）

導入にあたっては、現在と同様TENAアドバイザーのサポートもありましたが、全く新しいケアの方法に現場では戸惑いもあったと言います。それでも改善を重ねられ、現在はTENAアドバイザーの協力のもと、しらゆりの園様と共通する点が多いというTENAの理念や正しいあて方、またケア全般に関わる知識なども、皆様が熱心に勉強されています。そうしたスタッフの意欲を応援するため、研修時間も勤務時間に含む取り組みもされています。

ご利用者とスタッフが一緒に楽しむレクリエーション。
しらゆりの園様ではこうした交流も大切にしておられます

一人ひとりをよく観察し小さな変化もヒントにつなげる

ご利用者の尊厳を守り続ける

介助の必要なご利用者であっても、自立してイキイキと過ごしてほしい。それが「ご利用者の尊厳のある生活を守ることで、お年寄りを元気にしたい」というしらゆりの園様が目指す目標です。おむつ外しはそのための第一歩となるもの。そのために竹内孝仁氏（一般社団法人日本自立支援介護・パワーリハ学会理事（顧問））が提唱する「自立介護のためのケア理論」を学び、施設一丸となって取り組みました。

水分摂取については食事時に加え、10時と15時に水分を摂ってもらいます。水やお茶だけでは飽きてしまうので、日替わりジュースや寒天ゼリーも水分摂取

の一環として取り入れているそうです。

「水分の摂取状況は注意深く観察します。少なくなっているご利用者には積極的にアプローチして、摂取量を確保するよう努めています」（副施設長／仲村渠紀希さん）。ご利用者が集まれないコロナ禍では、ゼリータイプの経口補水液を活用するなど「コンチネンスケアの基本は水分補給」という意識をしっかり持って介護にあたっておられます。

飲食、排泄、睡眠はすべてひとつ

食事については、誤嚥の心配などからついつい、きざみ食や流動食といったより無理なく食べられる形態を選んでしまいがちです。しらゆりの園様では、流動食の人は少しずつきざみ食が食べられるよう、きざみ食の人は切り方をだんだん大きくするなど、ご利用者の状態を観察しながら常食に近づけていく取り組みにも力を入れておられます。

同時に口腔ケアに力を入れ、必要であればご家族に入れ歯をつくってもらうといった対応もします。コンチネンスケア同様、常食実現が目的ではなく、すべてはご利用者の生活の質向上を第一に考えておられます。

「食事の質が上がれば排泄の状態も向上します。食事を楽しむことができれば、ご利用者の笑顔が増え、元気になっていきます。排泄の悩みや不快感が減ることでも、ご利用者の生活の質が上がります。夜もよく眠れるようになります。すべてはつながっているのです」（仲村渠さん）

おむつ外しのために良質なおむつを活用する

スタッフの手拍子に合わせてカチャーシーを踊りながら来園者を見送るご利用者

常にご利用者を観察すること

自立支援のために、コンチネンスケアの第一歩としてTENAを導入。水分摂取や食事の管理などを徹底しても、実際におむつゼロを達成するためには、たくさんのハードルがあったと言います。

しらゆりの園様では、入所時にTENAコットンスペシャル（コットン素材のパンツ）とTENAコンフォートをご使用いただいています。お年を召されていく中で、TENAを使う機会は増えていきますが、日中はトイレで排泄することが基本です。

自分から「トイレに行きたい」と言えるご利用者ばかりではなく、適切なトイレ誘導が必要なご利用者もいます。ここでもご利用者をよく観察する、排泄のサイクルを知っておくということがとても重要だととらえられています。

トイレで排泄するのはうれしい

日中おむつゼロを達成する中で、「トイレに行きたい」という訴えもできるようになったご利用者が多いと言います。「自分からトイレに行きたいと言っていい」のだとご自身が気づき、スタッフも「言ってもらえてうれしい」と感じていること。「それが伝わるようになりました。そのお互いの関係が大事なのです」（仲村渠さん）

またトイレには便座があるために、重度の認知症の方でも認識しやすいとも言われています。トイレにお連れした際も「トイレに来たんだ」という安心感があり、排泄ができることの快適さなどを実感していただいていることも多いと言います。

施設一丸のトイレ介助

とはいえ、常にトイレ介助が必要になるということは、スタッフの皆様の負担が増えることでもあります。そのために、全職種スタッフがTENAを学んで全員がトイレ介助をできるようにするなど、日中おむつゼロ実現に向け施設全体で協力してきました。

過渡期にはスタッフの皆様の手間が増えたり、作業のやりくりに多少混乱が見えたりすることもあったそうです。けれど、トイレでの排泄がうまくいきだすと、ご利用者の笑顔が増え、それにともなってスタッフのやりがいも大きくなるという好循環で「みんなで日中おむつゼロを達成しよう、という気持ちも高まっていきました」（仲村渠さん）

ご家族の反対にはさまざまな想いがじっくり聞き、説明して解きほぐす

ケアの現場を実際に見てもらう

それでも数名、おむつを外せない方も残りました。そのご利用者はどのような状況だったのでしょうか。

「難しかった原因のひとつはご家族の反対。もうひとつは拘縮です」（仲村渠さん）。ご家族が反対されたのは、自由に体が動かせないご利用者を無理にトイレに座らせると怪我につながるのではないかという心配。また、スタッフに余計な手間をかけるのではないかとい

う遠慮などからくるものだったと言います。

「ご家族に施設まで来ていただき、2人体制でこのように介助します、と実際の方法を見ていただきました。こわばった体で便座に座っていることの難しさもお伝えしたうえで、全力でケアしますと。不安なこと、考えていることをじっくりお聞きして、しっかり説明することで納得いただきました」

説得ではなく説明をする。これがポイントだと言います。「おむつ外しが目標だから外したい」のではなく、「おむつを外すことで何が期待できるのか」「おむつを外したことで自立が進んだご利用者を見ているスタッフは、そのメリットを自信をもって語ることができます」

また、普段からご家族との連絡を密にして、どんなに小さな怪我や変化も逐次報告することを徹底し、信頼してもらえる関係作りにも力を入れておられます。

ご利用者の変化はスタッフのやりがいに

とはいえ、トイレに行くことを嫌がるご利用者もいたとのこと。「大柄な方が大暴れして、ご本人はもちろん、スタッフにも危険が及びそうなこともありました。ご本人が信頼しているスタッフを担当につけ、ゆっくり声がけをしながらトイレに誘導することを繰り返していくうちに『トイレで排泄するのは気持ちいい』とわかってくださったのでしょう。しだいに拒否反応がなくなっていきました」（仲村渠さん）。

「トイレや歯磨きの介助を嫌がるご利用者もおられます。そんな時、無理やり介助することがご本人のためなのだろうか、と悩むこともありました。日中もTENAを使えば、トイレに行かなくても快適に過ごせるのだからそれでいいのではないかと思ったこともあります」

それでもやはり、口腔ケアを怠ると、肺炎や脳梗塞を引き起こしかねないなど多くの問題が起きます。トイレで用を足すことも同じ。排泄後、笑顔を見せ、自信や安定感、尊厳を取り戻してイキイキと、さらに自立が進むご利用者もたくさんおられます。その姿はスタッフの皆様のやりがいにもなり、離職率を下げることや、「この施設だから働きたい」というモチベーションにつながると言います。

ケアを提供する側も受ける側も笑顔でいられるように

最後まで自分らしく生きる

「スタッフが難しいと感じたことを無理、と諦めてしまえば無理になります。でも無理な原因を一つひとつつぶしていけば、無理ではなくなり、新しい目標も生まれていきます」と友名理事長はおっしゃいます。

しらゆりの園様では、現在TENAコンフォートをお使いですが、今後は、ご利用者の状況に合わせて、よりマッチする製品を追加していくこともご検討中です。

「スウェーデンでは『おむつは処方するもの』という考え方が基本になっているとTENAを通して学びました。それは、どんなおむつを使うかということにとどまらず、一人ひとりに合ったケアを処方するということですね。処方という考え方が浸透すれば、おむつはネガティブなものではなく、よりよく生きるために、適材適所で使用するものという考えが広まるのではないでしょうか。人は誰でも必ず老いていきます。介助を受けるようになっても、自分らしく生きられる。笑顔で暮らせる。そういう社会であってほしいし、私たちは、それが叶うケアを提供していきたいと願っています」

パワーリハビリを中心にした自立支援型機能訓練と介護サービス（歩行の自立・食事の自立・排泄の自立）に取り組んでいます

TENAの勉強会では、
1枚使用の製品特性を活かしたあて方を
確かめながらスキルアップを図ります

スタッフインタビュー

笑顔と「ありがとう」につながる良質な福祉サービスの提供をめざして

やりがいを感じるとき

ご利用者にとって家族のように身近な関係でありながら、福祉サービスを提供するという意識も忘れてはいけないと考えています。身体的、精神的に満足感、安心感を与えることのできる質の高いケアを実現し、ご利用者やご家族に喜んでいただけること。そのためにはご利用者をしっかり観察してコミュニケーションをとる。うまくいかないときもありますが、そこで「どうしたらよかったのか」と考え、学び、成長につなげることができるのも介護職の魅力だと思います。

仕事でうれしかったこと

いろいろありますが、ご利用者をトイレにお連れして、チョロチョロという音が聞こえてきたとき。私もうれしいですし、ご利用者も明るい笑顔になるんです。重度認知症の方でも、ご本人がうれしい、スッキリしたと思うだけでなく、職員が喜んでいることもわかっておられると感じます。そういう良い変化に出会えたときは特にうれしいですね。

しらゆりの園　副施設長
仲村渠（なかんだかり） 紀希（のりき）さん

特別インタビュー

社会福祉法人 立命会　理事長 友名 孝子さま

お年寄りに元気になってもらいたいすべてはそのために

開所式の様子

ご利用者、ご家族の笑顔が介護者に誇りをもたらす

コロナ禍以前、「しらゆりの園」には、多くの方が視察にいらっしゃいました。「日中おむつゼロ」や「全員常食」について、たくさんの質問もいただきました。現場で介護にあたっている方々からの質問ですから、具体的なことも多く、スタッフが一つひとつ、自分たちが取り入れている工夫を答えてくれました。

もちろん、現場に即した対応はとても重要です。ただし、その前に大切なのは「なんのためにそうするか」という視点です。「高齢者の方々に元気になってもらいたい」「ご利用者やそのご家族に、安心して笑顔で過ごしていただきたい」。私たちはそのために、自立支援型の介護を続けています。

目標をひとつ達成したら、さらにご利用者が元気に過ごせるようにするためには何ができるか。それを考え新たな目標を立てます。難しい目標もあります。ときにはスタッフから「無理です」という言葉が出ることもあります。その場合「なぜ無理なのか」を聞いて、その理由を取り除いていくのが私の役目だと思っています。

スタッフは皆、ご利用者により快適な毎日を過ごしていただきたいと思ってくれています。けれど現場の実感として厳しいこともある。それを解決し、みんなで目標を達成すること。それによって、ご利用者の笑顔が増え、スタッフが介護のプロとして誇りをもって仕事を続けていけることが、介護の質を上げていくことだと思っています。

TENAと共に36年 一つひとつ目標を実現

しらゆりの園の介護は、竹内孝仁先生（一般社団法人日本自立支援介護・パワーリハ学会理事（顧問））の「自立支援型介護」の考えに則っています。私が竹内先生の考えに触れたのはTENAがきっかけでした。1988年に「しらゆりの園」を開設するにあたって、当時TENAのご担当者が教えてくれたスウェーデンの介護は、それまでの施設で布おむつを使用した介護の実情を目の当たりにしていた私に、「これならば質のいい介護の道が開ける」と思わせてくれるものでした。

当時はスウェーデン大使館から直接購入するしかなく、品質が高いぶん高価で、簡単に導入を決められるものではありませんでした。けれど、サラシを巻き付ける方式の布おむつでは、ご利用者は自由に動くこともままなりません。

サラシを巻かれて動けないから寝たきりになる。寝たきりになるから、さらに排泄ケアのためにサラシをグルグル巻き付ける。この悪循環を断ち切る必要がありました。しかもスタッフは出勤するなり、大量の汚れたサラシを洗って干し、シワをのばし……という作業に追われます。TENAの導入はご利用者とスタッフ、双方のためであり、自立支援型介護に欠かせないものでした。

こうしてTENAと共に歩み始めて36年。スタッフへの指導が行き届かず、TENAの良さを活かしきれていないと感じる時期もありました。安易にパッドを重ねたり、当て方がずさんになってしまった時に、いっそTENAをやめて布おむつに戻そうかと考えたこともありました。

けれどそれは、「やはりTENAなしではご利用者が元気になる介護は実現できない」と再認識するきっかけとなりました。TENAを正しく活用できるようスタッフのトレーニングをより徹底し、再度、私たちの理念や目標を共有することで、課題をひとつずつ乗り越えていきました。今後は、これまでの取り組みを活かしつつ、地域の方々の生活をサポートしていきたいと考えています。現在も、そしてこれからも、TENAと共に介護の質の向上に努めていきます。

TENA アドバイザー インタビュー

施設様に寄り添い 理想の実現をサポートしていく

ユニ・チャーム メンリッケ株式会社 九州営業部
ディストリクトマネジャー・TENAアドバイザー
吉田 潤平さん

ご相談いただいたことにはすぐに対処する。一方的に「お困りごとを聞かせてください」というだけでなく、自分が介護業界を志した理由を話したり、お困りごと解決の提案を続ける。そういう中から少しずつ施設様との信頼関係が築けるのだと信じて取り組んでいます。施設様には、それぞれ目指す姿があります。それに寄り添い、TENAが関われる場所を一緒に見つけていく。根拠に基づいて一緒に考え動いた結果、ご利用者の生活リズムの安定、介護する皆様の負担の軽減という成果に結びついた時が大きな喜びの瞬間です。

世界の風

Nr.1

日本の皆様へTENAがお届けしたいこと

1960年代にスウェーデンで誕生したTENAは現在、世界100カ国以上、世界中の排泄障害のある方の4人に1人に選ばれています。日本国内では約10万人に愛用される今でも「円滑な自力排泄のサポート」のための個別ケアの提供という理念は変わりません。そんなTENAの歴史と介護の歴史、TENAがこれからの日本で果たすべき役割などをお知らせいたします。

världens vindar

TENAのルーツ、スウェーデンの介護の歴史

TENAの生まれ故郷であるスウェーデンは、福祉大国として知られています。40年ほど前にはすでに、介護施設においてもおむつに頼らず、トイレ誘導を主体とした介護が当然のものとなっていました。そのような環境でお年寄りたちは、「自立排泄」を大切にしながら元気に活動しています。当時の日本は「寝たきり老人」が顕在化し、社会問題となりつつありました。介護施設では布おむつが一般的に使われていた時代です。

ただし、スウェーデンをはじめとする福祉大国でも、最初から理想的な介護が確立していたわけではありません。一説によれば、日本の「姥捨て」と同じ意味の言葉がスウェーデンにも存在し、自立できなくなったお年寄りは、昔の日本と同じように「捨て置かれる」存在と見なされていたとも言われています。

現在は福祉大国ですが、布おむつが主流だった時代や、排尿にカテーテルを多用していた時代がありました。プライバシーのない大部屋でおむつをつけて寝たきりで過ごし、大量の投薬やじょくそうに悩まされるといった時代を経てきているのです。

福祉の国でTENAが果たす役割

スウェーデンで高齢者介護に対する考え方が変わったのは、1980年代後半からです。この頃から、「それぞれの方の尊厳を大切にすること」を基本理念として最重要視した介護が模索されるようになりました。「誰もがその人らしい人生を最後まで送る権利がある」という考えが広がり、専門的な知識を学び経験を積んだ介護士を、社会を支える重要な専門家として尊重する考え方とシステムが生まれます。胃ろう、投薬、身体拘束、おむつなど、お年寄りの尊厳を奪っていた行為は、減らしたり、なくす工夫が重ねられ、適切な方法に変えられていきました。

新しい発想と理念に基づいた地域密着型・複合型の施設や、在宅介護システムが誕生し、家族も介護に参加していくようになります。同時に介護職の離職率が下がるというデータも得られるようになっていきました。それ以前は「介護を手厚くすれば介護職の負担が増える。すると離職率は上がり人的・経済的コストに社会が追いつけなくなる」と予測されていたのですが、逆の結果が示されたのです。一人ひとりの人格を尊重する介

護は、介護を受ける側だけでなく、介護する側にもやりがいや安息をもたらすことがわかりました。

1960年代に誕生し、世界で初めての紙おむつを開発したTENAは、すでにあった製品とケアのノウハウを組み合わせて提供し、介護や医療の専門職の皆さまと協働で、よりよいコンチネンスケアの実現にさらに力を尽くすことになりました。

世界におけるTENA

スウェーデンでは、おむつやパッドは「処方してもらう」という考え方が一般的です。眼鏡や補聴器と同じように、医療機器に分類されているからです。

おむつやパッドを処方する専門家が、ひとりにつき1時間15分のアセスメントを行います。排泄のメカニズムや失禁の原因を説明し、自分の症状と照らし合わせ、数種類のサンプルを試した上で、実際に使用するおむつやパッドを本人が選ぶのが基本的な流れです。これは「おむつやパッドを選ぶ」ことにとどまらず、一人ひとりに最適なコンチネンスケアを実現するために、欠かせないアイテムを処方することなのです。

排泄は「尊厳」に大きく関わります。どんなに親しい人とも共有したくない極めて個人的な行為なのです。当たり前にできていたことができなくなることは誰にとってもストレスですが、排泄の場合、失敗することで受ける心のダメージもとても大きなものです。だからこそ、適切なコンチネンスケアがとても重要になります。TENAはそうした考えのもと、より良い製品・ケアの開発・改良を続けています。

1990年代、スウェーデンに並び、または続いて高齢化社会に差し掛かった国々は、スウェーデンから多くのことを学びました。日本からも10万人以上の人がスウェーデンを訪れ、新しい発想に基づくケアを視察していきました。介護のシステムと方法などさまざまなことが各国に広まり、その結果、現在では世界で排泄障害のある方の4人に1人がTENAの製品とケアを利用しています。

「TENA for Japan」始動に向けて

今や日本は「少子高齢大国」として世界をリードする立場にあるといわれます。日本の介護の現場を、また、そのあり方や成功例、失敗例を世界が注目しています。

現在の日本には、スウェーデンやデンマークを参考にしたグループホームが1万軒以上もつくられ、ユニット型の高齢者介護施設も増えています。日本でも、人格を尊重した地域密着型のサービスが広まり浸透しています。「自分でトイレに行くための介助」の意識を共有する施設は今後も増えていくでしょう。

TENAはコンチネンスケア実現を目指す皆さまのパートナーとして、1987年に東京都内の高齢者施設で第1号導入を開始。現在では特別養護老人ホーム、老人保健施設、病院などを中心に、全国各地で約10万人が愛用するブランドとして個別ケアを基本にしたコンチネンスケアの質向上に貢献しています。

そしてこのたび、世界に先駆ける日本のケアへのサポートにさらに注力するにあたり「TENA for Japan」プロジェクトを始動いたしました。

製品だけでなくTENAサービスを提供し、施設・病院様におけるコンチネンスケアの仕組み構築と運用を、担当のTENAアドバイザーがサポートいたします。Webサイトやオンラインを活用したTENAアカデミーなどの勉強会もこれまで以上に積極的に開催してまいります。

TENAのおむつやパッドは、人間工学を研究し、それらに基づいた設計となっています。体にフィットして動きやすく、高分子吸収体の吸収性能も、他にはないものだと自負しています。長時間使用しても漏れがなく、快適性も高めているため、夜中のパッド交換が必要ありません。それは睡眠をじゃまをすることなく、ぐっすり眠れることにもつながります。

このように磨き続けている性能を使いこなし、良さを受け取っていただくためには、目的にあった製品を選び、正しくあてることが大切です。施設様それぞれの「TENAを活用する意義」「採用アイテムの選び方」「コンチネンスサポートチームの運用」など、きめ細やかなサポートは、担当TENAアドバイザーにお任せください。

明日、介護が必要になっても、普通の暮らしを続けたい。その願いは誰も同じでしょう。同時に介護職の方であれば「この施設に親を任せたい」と思える施設で働きたい。ご家族であれば「本当に安心して任せられる施設に出会いたい」と願うことでしょう。

すべての願いを叶えるために、TENAは一人ひとりに寄り添ったケアを、世界ブランドの視点でお届けしてまいります。

Mild Vind
Uni-Charm Möinlycke K.K.
COMMUNICATION MAGAZINE
ミルヴィン
【第２号】
2024.11
■発行日：2024年11月1日
■発　行：ユニ・チャーム メンリッケ株式会社
〒107-0051 東京都港区元赤坂 1-5-12

成長の秋

たかいひろこ

コラム

こんなときどうする？
ナッピー先生のレクチャータイム

“ちょっとした工夫で自立度がアップ”

「トイレに座る」の実現に向けて

深く座って前かがみが基本じゃ

トイレで排泄するためには、便座に深目に座って、前かがみの姿勢をとってもらうことが大切じゃ。便座の上で動くときには、無理に体を持ち上げず、ゆっくりと後ろにずらすような気持ちで。体の前でクッションやぬいぐるみなどを抱いてもらったりすると、自然と前かがみになりやすいぞ。

時間と心に余裕を持とう

なにより大切なのは、トイレに座る時間をストレスと感じないように気を配ることじゃ。プレッシャーに感じてしまうと排泄がうまくいかなかったり、トイレでの排泄をイヤがったりする原因になるぞ。一人ひとりの排泄のサイクルに合わせてトイレに誘導し、せかさず、近くで見つめすぎず、穏やかに会話をするのがいいじゃろう。自立排泄への着実なステップになるぞ。

動作を一緒にやってみよう

便座に座れたら、目線を合わせて向き合い、ゆっくり声をかけよう。そのときにちょっと離れて向き合うのがポイントじゃ。人は目の前にいる相手の行動を無意識に真似するので、向かい合わせでお辞儀をすると同じように前傾したり、離れたところから互いに手を伸ばしたりすると前かがみに。そうした工夫で排泄に適した体勢をとりやすくなるはずじゃ。

『ナッピー先生と学ぶ大人のおむつ読本』

コンチネンスケアの基本を漫画とコラムでわかりやすく紹介。介護や看護に携わっている方はもちろん、尿漏れが気になる方にも役立つ情報が満載です。
Amazonや楽天でご購入いただけます。

・電子版：８８０円、
・ペーパーバック版９９０円
（ともに税込み）

TENAの変わらぬ理念

個別ケアにより、円滑な自力排泄が行えるようお手伝いさせていただく

スウェーデンのトイレットトレーニング事情をお伝えする2000年3月発行ニュースレター

2000年３月に発行したニュースレター「テーナ・コンタクト10号」では、スウェーデンのトイレットトレーニング事情をレポートしています。
スウェーデンでは「誰もがトイレで排泄する権利がある」と考えられています。それは、どんなに優れたおむつでも決してトイレの代りにはならないからです。
また、人道的な理由以外にも、医学的な理由として、トイレで排泄して膀胱内に残尿をのこさないことも挙げられています。看護師アンナ＝カーリン・マグヌソンさんは「ベッドに横たわっておむつに排泄すると膀胱を空にできない人でも、トイレにいけば膀胱がリラックスして、ほぼ完全に中身を空っぽにすることができるケースがあります」と語ります。
私たちユニ・チャーム メンリッケは、これまでも、そして、これからもトイレットトレーニングに取り組む皆さまを様々な形でサポートします。
オンラインＴＥＮＡアカデミーでは、サイト会員向けにトイレットトレーニングをはじめ、排泄に関わる個別性の高いテーマを学ぶオンライン学習プログラムをご用意しています。ぜひ会員登録をしてご活用ください。

Mild Vind
2024.11 Nr.2

Contents

P２：しらゆりの園様
P６：世界の風
P８：４コマ漫画
コラム
TENAの変わらぬ理念

Mild Vind（ミルヴィン）は、スウェーデン語で「やさしい風」の意味です。

バックナンバーはこちら

オンライン TENA アカデミー
https://tena-academy.jp

企画・制作・編集：㈱東海教育研究所、オフィスふたつぎ
デザイン：WHITELINE GRAPHICS CO.
執筆協力：稲佐知子
扉写真：砺波周平
漫画：たかいひろこ